

# 福永武彦とジュリアン・グリーンにおける不可能な愛の主題（二）

井上三朗

## 目次

- 一 問題提起——孤独と愛——
- 二 作中人物たちの孤兒性
- 三 障害
- 四 愛の不可能性
  - (1) 『アドリエンヌ・ムジュラ』
  - (2) 『幻を追う人』と『モイラ』
  - (3) 『風土』
  - (4) 『草の花』
  - (5) 『海市』
- 五 結び

（太字は今回掲載分）<sup>1</sup>

## 四 愛の不可能性

前章で、グリーンと福永の作品における愛の障害をしらべた。その障害は戦争であれ、愛の対象が同性であれ、義理の兄（弟）であれ、既婚者であれ、はたまた、別の人物を愛している場合であれ、ともかく愛する主体の外部で観察されるものであった。しかしながら、障害は愛する人の内部にも潜んでいる。愛を不可能にする要因は、愛する人の外側だけでなく、その内面においても見いだされる。このことを、二人の作家の小説を個別的に検証することによって確認したい。グリーン作品からは、『アドリエンヌ・ムジュラ』と、『幻を追う人』および『モイラ』を取り上げ、この三作に見られる愛の形態を分析する。そのあと、福永の『風土』『草の花』ならびに『海市』における愛のかたちを調査する。そのうえで影響関係を考究したい。

(一)『アドリエヌ・ムジュラ』

この小説では、△あかして▽に住むアドリエヌの愛が物語られる。ラ・トゥール・レヴェックの郊外の街道を散歩中、彼女は馬車に乗ったモルクール医師を偶然見かけ、恋心をいだく。この日から、アドリエヌの生活は一変する。「自分の安楽のためにしか生きていない」父親と、「自分の病気のことしか考えていない」姉とからなる家庭内で、孤立を意識し、「一種の倦怠」を覚える(一、二九八頁)。彼女は孤独からの解放をもとめて、医師への愛を生きる。モルクールとの再会を願って郊外の街道への遠出を繰り返し、医師が近所に居を構えていることを聞き知っては、医師の館を部屋窓からしげしげと眺める。すると館は、「アラビアの物語にある宮殿のように」現前する(一、三〇二頁)。アドリエヌにとって、医師の館は幸福の宿るところであり、夢想にいざなうものとしてある。館を間近から見つめるために夜の散歩にも出かける。「この白い小さな家と、灯りのともった窓」を面前にしつつ、「あの人はあそこにいる」と思念して、幸福感にひたる(一、三〇五頁)。彼女は医師の存在をたしかめ、医師が生きているのを実感することに、人生の意義を発見する。モルクールへの愛のなかに、自らの生の唯一の証しを探索する。

とはいえ、このような愛は、対象との交流を目指さない。対象との△へだて▽のなかで生きられる愛である。医師の館を目の当たりにして、アドリエヌが仕合わせな気分になるとしても、医師との

距離は狭まらない。やがて幸福感は消えうせ、苦しみが生じる。「こうしたありふれた家を眺めて、何がうれしいのだろうか？」(一、三〇九頁)と、彼女は自問するに至る。以前は「宮殿」のように見えただ館は、陳腐な家になり下がる。夜の外出の途中、アドリエヌは医師の館に近づき、「館の壁に唇を押しあて」る(一、三〇九頁)。満たされぬ情熱が産み出したこの行為は、医師とのあいだに横たわる△へだて▽を乗り越えようとするくわだてと解せる。だが彼女は現実のモルクールではなく、観念もしくは想念のなかのモルクールにしか接近していない。他者は現実には到達しえない存在である。ここから、アドリエヌの愛の不可能性が浮かび上がる。

不可能な愛は告白されない愛でもある。アドリエヌは医師のみならず、父親ムジュラ氏や姉のジェルメーヌにも本心を打ち明けない。彼女は秘密と沈黙のなかで自らの愛を生きる。娘の外出を不審に、また不快に思うムジュラ氏は、娘を虐待し、外出を禁じる。日常生活の習慣に固執するムジュラ氏は、暴君的な性格の持ち主で、病いの床に臥せるジェルメーヌを無理やり食堂に降りてこさせ、一緒に食事をさせる。このため、ジェルメーヌは妹の助けを借りて家出する。アドリエヌが姉の出奔に手を貸したことを見抜き、恋の相手がモルクールであるのを突きとめたムジュラ氏は、激怒の中で娘を責めさいなむ。さらに医師のところに行つて、娘の愛の望みを打ち砕こうとさえる。愛する自由を奪われそうになったアドリエヌは、父親を階段から突き落とし、死なせる。こののち、彼女は

自由を獲得する。だが孤独感を深めていく。この感情はわけても、愛するモルクールから隔絶しているという事実<sup>②</sup>に由来する。ひとりて生きることに耐えかねた彼女は旅に出る。そして旅先で、医師に宛てて二通の手紙をしたため、内心の思いをぶちまける。もつとも、この手紙の一つは発送されない。もうひとつは発送されるとしても、署名されない。投函されない手紙、匿名の手紙は、告白の可能性を露呈している。

アドリエンヌは不毛な情熱の苦悩の果てに発狂する。その直前、気をうしなつてルグラ夫人の介抱をうけた折、来診したモルクールに、彼女はついに胸中を披瀝する。医師はアドリエンヌの愛に応えない。けれども、だからといって、彼女は愛することをやめない。胸襟を開くのが遅すぎたがゆえに、事態を打開できない。結局のところ、遅すぎた告白は、告白の可能性を浮き彫りにする。このようにアドリエンヌの愛は、不可能な・告白されない愛である。

では、いったいどうしてアドリエンヌの愛は不可能なかたちをとるのか。彼女の内気さ、内向的・自閉的性格がその理由として挙げられる。しかし一切を性格の問題に帰着させるのは誤りである。アドリエンヌが医師に接近しないのは、何よりもまず、愛し方に起因する。彼女は他者の現実<sup>③</sup>にそくして愛するのではなく、夢想のなかで愛をはぐくんできて、このことが愛の可能性をもたらししている。この点、アドリエンヌの愛は、西欧の恋愛の原型をなすとされる、トリスタンとイゾーの愛の延長上にある。ドニ・ド・ルージュモン

は『愛と西欧』（二九三九）において、この二人の愛を解析し、「彼らが愛しているのは愛であり、愛するという事実そのものである」と論断している。この見解はアドリエンヌにもあてはまる。白壁の館を凝視しつつ夢想にふけると、彼女は自らの愛を愛して、「愛するという事実」のなかによるこびを探求しているとうけとれる。ルージュモンは、「二人（トリスタンとイゾー）は燃えるために、互いに他者を必要とするが、必要なのは、あるがままの他者ではなく、他者の現前でもない。そうではなく、むしろ他者の不在なのである」とつづけている。アドリエンヌもまた、情熱を燃焼させるために、「他者の現前」を必要としない。夢想のなかで愛する彼女にとつて、「あるがままの他者」、他者の現実<sup>③</sup>は顧慮の外にある。現実から遠ざかり、「他者の不在」のなかで、夢想の愛を生きることが肝要なのだ。

愛が対象の現実から離れ、△へだて△のなかで生きられると、対象は当然理想化される。アドリエンヌは父と姉とともに暮らしているとき、△あかしで▽では「悲しみ」が支配するのにたいし、医師の家には「幸福」が宿ると直覚する（I、三四八頁）。「ここでは、生命が衰え、死が家のまわりをうろついている。あそこでは、心配のない、平穏な生があり、その生は日々繰り返される、変わらないよろこびで満たされている」と認識する（I、三四八頁）。彼女の想念のなかで、モルクールは△幸福▽と△よろこび▽にあふれた△生▽を表象する人物となり、△悲しみ▽から△幸福▽へ、△死▽

からへ生Vへと橋渡ししてくれる理想の存在となる。アドリエヌ又は自分が身を置く世界と医師の住む世界とを、「ここでは」(E)と「あそこでは」(F)といったように、対照法で把握している。へこVが此岸を、へあそこVが彼岸を指し示すことはことわるまでもない。モルクールは彼方の存在となり、崇拜すべき偶像と化する。

アンドレ・ブランシエはアドリエヌの愛を、「ある《ほかのところ》への脱出のころみ<sup>④</sup>」と解釈している。彼女の愛が彼岸<sup>⑤</sup>彼方へのあこがれであることは、この解釈から再確認することができる。ブランシエによれば、アドリエヌが愛するのは、実在する「ひよわな医師」ではもはやなく、「想像上の存在」であり、「夢の人」にすぎない<sup>⑤</sup>。たしかに、理想化・偶像化されたモルクールとは、彼方への憧憬、へこVからの解放への願いが結晶させた「想像上の存在」、つまり「夢の人」の謂である。つまるところ、モルクールとは、ブランシエの認定するように、「彼女の欲望の創造物<sup>⑥</sup>」であり、幻にほかならない。

アドリエヌの愛を、いったい何がささえているのであろうか。作中、「素朴な魂の持ち主にありがちな一種の神秘主義によって、彼女(アドリエヌ)は、現在の自分の生活の境遇を苦しいと思えば思うほど、自分がいつそう彼(モルクール)のそば近くにいるような気がした」(I、三四八頁)との記述が読める。アドリエヌにおいて、苦しむことが、愛する人のそばに身を置くことにつながる

ると信じられている。「もしもあの人を愛していなければ、こんなに苦しみはしないだろう」(I、三四八頁)と彼女は自分を慰める。この感懐を勘案すると、愛しているせいで呻吟することこそが、愛する相手に接近する道であるとの信念が読みとれる。この信念は、苦悩をおして魂の救済を希求する宗教的な思想である。グリーンは一九二四年に発表した『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』のなかで、「天につかえること、それは苦しむことだ」(I、八九二頁)と言い切り、苦しむ人間こそ、神に近いという見方を表明している。アドリエヌの発想のなかに、作者の宗教観の反映がかいま見える。もともと、モルクールは神ではない。とはいえ、崇拜すべき偶像である。彼女は医師を神のように愛しているであろう。生身の人間を神のように愛することは、もちろん錯誤である。しかし苦悩による救いを信じ、苦しむことで他者のもとに到達できるという宗教的・神秘的な発想が、医師への不可能な愛をささえている。

『アドリエヌ・ムジュラ』のヒロインの愛を論じた。アドリエヌの不可能な愛が夢想のなかの愛であることが明確になったと思う<sup>⑦</sup>。この点において、この小説はグリーン的愛の極北のかたちを提示している。

## (2) 『幻を追う人』と『モイラ』

福永が翻訳した『幻を追う人』と『モイラ』を検討することにし

よう。まず『幻を追う人』にかんしてであるが、この作品では、主人公マニユエルの、従妹マリー＝テレーズにたいする執着が扱われている。みなしごになったマニユエルは、伯母のプラス夫人の家に身を寄せ、成熟してきた従妹に魅せられる。ある晩、欲望にかられた彼は、マリー＝テレーズを散歩に連れ出す。しかしマニユエルは欲望に完全に身をゆだねることができない。「本能それ自体と同じくらい力強い本能の気まぐれによって、ほくは自分もつとも欲するものから逃げてしまう傾向があった」（Ⅱ、三〇五頁）と彼は内省している。彼のなかには、欲望の対象を忌避させるものが潜んでいる。夜の散歩の一件がマリー＝テレーズの口からプラス夫人に伝えられ、料理女にも知られていることがわかったとき、マニユエルは、「このような事態がほくに起こったなんて正しくない。（…）純潔のままではないと望み、マリー＝テレーズに目を向けるまでは、不純さというものを名前では知らなかったこのほくに」（Ⅱ、二六五頁）との感慨にふけっている。「純潔のままではないと望み」という言い方によって、彼が自己の純潔さを追求する人間であることがたしかめられる。彼が欲望をいだきつつも、欲望を実現させることができないのは、このためである。

森の散歩の挿話も、このような文脈のなかで把握することができ。マニユエルは従妹と夜に外出したあと、病いに倒れ、闘病生活に入る。病いが小康状態を取り戻した頃、マリー＝テレーズの友だちのポーリーヌとエドメ・ド・ガイアルデが家に遊びにやってくる。

マニユエルは従妹とこの二人の友だちと連れ立って、ラ・コンブの森へ散歩に行く。森の中で彼は目隠し鬼ごっこをすることを提案する。自ら鬼となり、三人の少女たちを追いかける。こうしてマリー＝テレーズを抱きしめる機会が到来する。けれどもマニユエルは従妹の脚を認めるや否や、「逃げ去ること」を考える（Ⅱ、二九六頁）。それはなぜか。欲望にとらえられることにはたいして恐怖を覚えたからであり、自己の純粋さへのこだわりがあるからだ。

とはいえ、マニユエルは従妹の脚に眩惑され、その場を離れることができない。この瞬間のことを、「腹がしめつけられた」（Ⅱ、二九六頁）と彼は顧みている。この表現は、マニユエルにおける欲望のたかまりを暗示している。また彼は、「闇のようなものが自分の上におりてくるような気がした」（Ⅱ、二九六頁）とも回想している。この印象は、欲望の高揚と、その欲望への反撥とのせめぎ合いのなかで、マニユエルが自己を見うしないような状況に置かれていることをほのめかしている。しかし「依然として、ほくを支配している意識を呪うに足りるだけの正気さは残っていた」（Ⅱ、二九六頁）とつづけているように、彼はかろうじて頭脳の明晰さを保っている。この述懐は、マニユエルが二つの意識のあいだを揺れ動いていたことを示している。一つは、「ほくを支配している意識」であり、欲望を叶え、悪を犯すことを願う意識、要するに、悪の意識である。もうひとつの意識は、この悪の意識を「呪うに足りるだけの正気さ」であるが、欲望もしくは悪とたたかうのに十分、明晰な意識であり、

一言でいえば、善の意識である。結局、善の意識が勝ちを制し、「逃げろ！」と叫んで、彼はマリー・テレーズを遠ざける。

この善の意識は純粹志向と言いかえられる。マニユエルは純粹志向を有するがゆえに、欲望に翻弄されながらも、欲望とたたかい、欲望を制禦しようとする。しかしながら、欲望は消滅しない。彼は欲望に煩悶することを強いられる。また欲望とのたたかひの過程で、今見たように、欲望は悪とみなされるので、愛が告白されることもない。マニユエルがマリー・テレーズに、「ぼくが愛していたのは君なんだ」（Ⅱ、三八九頁）と打ち明けるのは、死の間際にすぎない。純粹志向は、孤独のなかでの内心の葛藤を生じさせるとともに、愛の欲望の成就を妨げている。『幻を追う人』における愛の不可能性は、主人公の純粹志向に源を発する。

次に、『モイラ』に目を向けよう。『モイラ』では、主人公ジョゼフと混血の娘モイラとの愛の物語が繰り返りひろげられる。アメリカ南部の大学に入学するため、デア夫人の下宿に到着したジョゼフは、部屋に案内される。その部屋は、デア夫人の養女モイラが占有していた部屋で、そのことは、モイラが置き忘れたシガレットケースに、夫人が言い及ぶところから暗示される。ジョゼフと不在のモイラとのつながりは、第二部第二章の、女中ジェマイマの話によって強化される。日曜日、ジョゼフの部屋を掃除しにやってきたジェマイマは、彼の部屋が以前はモイラのものであったことを伝えるとともに、「モイラお嬢さまはきれいな方ですよ」（Ⅲ、九七頁）と知らせ

る。この言葉はジョゼフの想像力を刺戟し、第二部第九章、彼はまだ見ぬモイラの姿を思い描いている。女中は、「ただお嬢さまにはお考えがおりなのです。それにほかのこともありますし……」（Ⅲ、九七頁）とも教える。この謎めいた発言は、モイラの放縱・不品行を示唆するが、モイラへの好奇心をそそらずにはおかない。ジェマイマの談話のうちでとりわけジョゼフの注意をひくのは、ベッドの置き方にまつわるモイラの習慣への言及である。「モイラお嬢さまがいらつしゃつた頃は、ベッドはほとんど部屋の中にあつて、少し斜めに置かれていました」（Ⅲ、九六頁）と女中は口に出し、「ただお嬢さまは、ベッドがほとんど真ん中にあつて、少し斜めになることを望まれるのです」（Ⅲ、九七頁）と繰り返す。この話はジョゼフに衝撃を与える。女中が立ち去つたあと、彼はベッドを上げしげと見詰め、「自分が眠っているベッドの中で、彼女（モイラ）は眠つたのだ」（Ⅲ、九七頁）との感慨にふけつてゐる。さらにその日の晩、ジョゼフは、モイラがかつてそうしていたように、ベッドの位置を変えて身を投げる。置きかえられたベッドがモイラの代替物であることは、贅言を要しない。モイラと合体し、彼女のからだを所望したいという欲求がジョゼフを動かしている。ジェマイマの話を聞くことによつて、ジョゼフはモイラと出会う前から、彼女への思い、ないし欲望にとりつかれる。

ところで、ジョゼフはプロテスタントの熱狂的な信者である。彼にとつて、恋愛よりも宗教のほうが重要である。そればかりか、恋

愛と宗教とは相容れない。シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』を読んでみると、彼には、この作品に描かれた恋の情熱が「魂の救い」に对立し、二人の恋人たちが「裁きの炎によって永遠に焼かれて」いるように思われる（Ⅲ、三九頁）。ジョゼフにおいて、愛の情熱は、罰として「裁きの炎」を招くものというより、地獄の火であるところの「裁きの炎」それ自体として認識されている。いったい、愛はどうして「救い」または宗教と両立しえないのか。肉体欲望への嫌悪があるからだ。ジョゼフは夜、暗闇の中で服を脱ぐ習慣があり、その折、「肉体は地獄に人をみちびき、魂は天国に連れて行く」との父親の教えを想起しながら、「そのとおりだ、肉体はキリスト教徒の敵なのだ」と思索している（Ⅲ、一〇六頁）。ジョゼフは信仰とのかかわりで肉体を敵視する。この姿勢は自己の純粹さを保持しようとする態度と表裏をなす。かくして、『幻を追う人』のマニエルから見るとれた純粹志向を、ジョゼフにおいても認めることができる。

恋愛と同様、ジョゼフは結婚をも否定的にとらえている。彼の結婚観は第二部第十二章のデーヴィドとの対話をとおして明るみに出される。牧師志望の友人デーヴィドがうれしげに、誇らしげに相手の写真を見せながら、婚約していることを告げたとき、ジョゼフは、「結婚は危険な誘惑だよ」と口を開き、「肉や肉のよろこびや、それ〔結婚〕が必然的に予想させるありとあらゆるもの」のために、デーヴィドの結婚に反対する（Ⅲ、一三〇頁）。「君がその女性を抱きし

めたとき、君は神さまのことを考えるだろうか？」（Ⅲ、一三〇頁）と彼は問いかける。ジョゼフは結婚のなかに、純粹さをおびやかすもの、肉体の営みしか見ない。それゆえ、結婚は神あるいは信仰からひき離す「危険な誘惑」となる。肉なるものへの反撥から、ジョゼフは恋愛とともに結婚をも罪と結びつける。

ジョゼフの肉体敵視は、性本能への嫌悪からも窺知できる。彼は第一部第十八章、友人デーヴィドとの会話のなかで、いかがわしい場所・淫売屋にかよう学生たちを非難しつつ、「ぼくは性の本能を憎むんだ」（Ⅲ、八六頁）と口を切り、「この盲目の力は悪なんだ」（Ⅲ、八七頁）と断定する。さらに、「ぼくらは錯乱の発作の中で孕まれるんだ」（Ⅲ、八七頁）と言い放っている。ジョゼフは受胎の瞬間を、性本能の「盲目の力」がひき起こす「錯乱の発作」のときと理解する。彼は性本能を全否定し、生殖行為すら容認しない。この性本能の嫌悪は、彼の恋愛観や結婚観と同じく、極限にまで押し進められた純粹志向の具体的なあらわれである。

こうした純粹志向のせいで、先に見たモイラへの思い・欲望は、不純な、罪あるものとして排斥される。ジョゼフは友人デーヴィドのいるファーガスン夫人の下宿に変わる。ところが、第二部第十章、デア夫人のところを忘れてきたセーターを取りに行ったとき、帰省しているモイラを見かける。口紅を塗りたくった赤い唇、赤い服、それにリラの香水の匂いが、彼女の官能性を象徴するものとして、ジョゼフの記憶にこびりつく。またモイラはジョゼフのセー

ターを床の上に投げ捨て、それを拾わせることによって、彼に屈辱感を味わわせる。ジョゼフはモイラの傲岸な言動を怒りのなかで思ひ出す。この怒りは、モイラに執着していることの証しである。モイラとの出会い以降、ジョゼフはますます彼女への思い・欲望に揺り動かされる。もちろん彼は欲望とたたかう。しかし欲望をどうすることもできない。ジョゼフはデーヴィドに、「ぼくが心に思っている女が一人いる」(Ⅲ、一四八頁)と切り出し、苦しみを訴える。「神とぼくとのあいだに彼女がいるんだ」(Ⅲ、一四八頁)と肺肝を披く。彼にとつて、モイラは神と自己とのあいだに立ちほだかり、神のもとに到達するのをはばむ存在である。愛は欲望と同一視され、他者<sup>II</sup>愛は救いを妨げるものとなる。だからこそ、ジョゼフは、『*Je l'aime*』ではなく、「ぼくは彼女が嫌いなんだ」(*Je la deteste*)」(Ⅲ、一四八頁)としか言いえないのである。

その後の物語の進展を要約しよう。デア夫人の下宿に集まる学生たちは、ジョゼフ(の宗教)を物笑いの種にするため、陰謀をたくらむ。品行のよくないモイラにジョゼフを誘惑させるというものである。ジョゼフに興味をもつモイラは、学生たちのくわだてに同意する。彼女はファーガスン夫人の家のジョゼフの部屋にしのみ込む。ジョゼフが自室にもどつてくると、鍵をかける。モイラと二人きりになったジョゼフは肉体的欲望とたたかう。長い沈黙の時間がすぎると、とうとうモイラは部屋を出て行こうとする。その寸前、ジョゼフの髪に触れる。これが引き金となつて、それまで抑えつけてきた

欲望が堰を切り、ジョゼフはモイラに襲いかかる。性の交わりを結んだあと、二人は眠る。目覚め、我に返ったジョゼフは、肉の誘惑に負けたことへの怒りと絶望から、寝ているモイラを絞め殺してしまふ。モイラ殺害は、純粹志向のひき起こす必然的な結末である。

ジョゼフとモイラの物語の全容は、後者の心変わりを視野に入れてはじめて了解される。ジョゼフの部屋に闖入し、彼と時をすごすモイラは、いつも相手にする男たちとはちがったもの、すなわち純粹さを目の当たりにする。暇つぶしのため、彼女は友人のセリナに宛てて手紙をしたためる。その手紙のなかで、「楽しむための機械であることはもうたくさんだわ」(Ⅲ、一六九頁)と書き、これまでの自堕落な生き方を反省し、改めようとする。「負けたわ、セリナ。あたしのほうこそ、恋をしているのよ」(Ⅲ、一六九頁)と白状する。モイラはジョゼフへの愛を自覚する。彼と対峙することによって、欲望とはちがった現実、愛の現実があることを悟る。「あたしは、あなたたちみんなが考えているような汚れた女の子じゃないのよ」(Ⅲ、一六九頁)と彼女は断言する。男たちと交わるなかで、自分のもとめてきたものが、快樂ではなく愛であつたことを得心するに至る。部屋を立ち去る間際、自分のほうに「けだもの」のように迫つてくるジョゼフに、彼女は、「いやよ」(*Je ne veux pas!*)と二度口にする(Ⅲ、一七三頁)。この言葉は媚態を演じ、ジョゼフの欲望を刺戟するための虚言ではない。本心から言われたものとうけとるべきである。純粹さに接してジョゼフを愛したモイラは、

自己の愛を欲望から浄化したいのである。だがジョゼフは恋愛的状況のなかに肉体の現実しか見ない。だからこそ、彼はモイラを殺してしまうのである。モイラが欲望とはちがった愛を発見するのにたいして、ジョゼフにとって、愛は欲望と同義語である。純粹志向を徹底して生きる彼は、愛を知りえない。『モイラ』は純粹志向の惹起する悲劇であると判断することができる。

『幻を追う人』および『モイラ』の主人公の純粹志向を概観した。<sup>8)</sup>『アドリエンヌ・ムジュラ』の夢想のなかの愛と同様に、純粹志向は愛の不可能性を招来している。

### (3) 『風土』

福永武彦の小説に目を転じることにしよう。『風土』の検討からはじめるが、ここでは、三枝芳枝の桂昌三にたいする愛、それから早川久邇の三枝道子への愛を探索することにした。

第一部と第三部、すなわち一九三九年の時点において、三枝芳枝と桂昌三とは愛し合う。けれども先述したように、戦争の勃発が二人の愛の障害となる。とはいえ、第二次世界大戦の開始によってパリ行きが叶わぬものとなるにしても、日本で新たな生活を模索することはできる。だが作品は、二人の幸福な未来を予感させるような終わり方をしていない。戦争は二人の愛に結婚の不可能を暗示するものとして言及されている。その理由は、桂が挫折した芸術家であるからである。桂はこれまで日本という風土のなかで、画家として

大成することができなかった。桂が自己の芸術を甦らせ、確立する道は、芳枝とパリで生きる以外にない。画家として再生できない以上、彼は芳枝との結婚を望むことができないのである。

しかしながら、二人の愛の不可能性は、芳枝の愛し方にも由来する。この点にかんして、夫太郎の存命中、芳枝が夫を「ひたむきに」(一、四七七頁)、死ぬほどに愛していたにもかかわらず、太郎が愛人サラアとの関係を持ちつづけたという事実は、考慮に入れる必要がある。芳枝は「モジリアーニの妻のように」(一、四七七頁)、夫に献身的に尽くした。それでも夫を満足させることはできなかった。生前、太郎は芳枝に、「お前は自分を愛しているのだ、自分が心へえがいている僕というものを、(…)愛しているだけなのだ。本当の、あるがままの、この三枝太郎ではない」(一、四七八頁)と痛言して、妻の愛の欺瞞性を攻撃している。太郎によれば、芳枝は現実の自分ではなく、「自分が心へえがいている僕というもの」、換言すれば、想像上の存在を愛しているにすぎない。たしかに「モジリアーニの妻」のように夫を愛するとは、芸術家としての夫、つまりは夫のなかの芸術的才能を愛することである。自分の脳裡に描く架空の芸術家を愛することである。現実生きる自己の全体ではなく、自己の一面を理想化して愛してただけだと、太郎は非難するのである。それは結局、己れの愛を愛することであり、「お前は自分を愛しているのだ」と太郎がとがめるように、自己愛の変奏である。太郎にたいする芳枝の愛は、「モジリアーニの妻」のように生きたい

という願望が投影したものにすぎず、そのことが太郎をして、愛人サラアのもとに走らせる原因になったのである。

一九三九年の芳枝の、桂にたいする愛にも、同一の願いが反映している。二人のパリでの暮らしを夢みる芳枝は、「わたしはパリに行つて、あの人を本当の、立派な画家にしなければならぬ。モジリアーニの妻のように」(一、四七五頁)と自分に言い聞かせる。芳枝が愛するのは、芸術家としての桂の天分だけであり、現実の桂の全体ではない。一九三九年の時点でも、芳枝は想像上の存在、言いかえれば、自己の愛、つまり自己だけを愛している。渡仏を望む芳枝は、「もう道子のために犠牲になることはない。わたしはわたしのために生きる」(一、四七六頁)のだと決意する。この決意は、彼女の愛が自己本位のものであることを示している。なるほど愛に生きるとは、自分が幸福になろうとする意志、「わたしのために生きる」意志をつらぬくことではある。しかし他者とともに幸福になり、他者のために生きることを切願することでもある。芳枝には、この願いが欠落している。さらに芳枝には、娘道子のために「犠牲にな」つたように、桂のために自己を犠牲にしようとする姿勢が認められない。「モジリアーニの妻」のようになるためには、当然自己犠牲が要請される。けれども芳枝は自己のために生きることを考えるだけで、桂のために生きるという発想をもたない。芳枝の愛は、自己の願いから発しており、他者のあるがままの現実にくくしたものでない。

桂昌三と三枝芳枝は、第三部三章、ホテルの一室で肉体的に結ばれる。桂は長年来の愛の欲望を叶える。だが桂は真の満足感を得ていない。なぜなら桂が希求するのは、「エロチックな陶醉」ではなく、「人間を高める」ところの「魂」であるからだ(一、四一三頁)。桂は芳枝との性の交わりをとおして、彼女の「魂」を感じることで満足しない。彼は、自分の手に入れたのが、「何等の魂の羽ばたきをも感じさせないただの肉体だけ」(一、四一五頁)であることに絶望する。ベッドで芳枝の傍らに横たわる桂は、他界した三枝太郎のことに思いをはせ、「恐らく三枝が死んだのは、この人が三枝を愛していなかったからだろう、愛していないことが三枝に分つたからだろう」(一、四一五頁)と推察する。「この人には他人を愛することが出来ないのだ、自分をしか愛し得ない人なのだ、僕をもまた決して愛してはいないだろう」(一、四一五頁)との印象をいだく。いったい桂はなぜ芳枝の愛を疑うのか。自らの感覚のよろこび、自己の肉体の幸福しか、彼女の眼中にないからだ。芳枝の自己本位の姿勢は、愛する男と性的に交わる際にも発露する。その際、他者は現実を離れ、自分の欲望が結実させた想像上の存在へと変貌する。その想像上の存在との交合のなかで、彼女は「エロチックな陶醉」を味わう。だからこそ、芳枝は「自分をしか愛し得ない人なのだ」と、桂に認識されるのである。自己の幸福だけを待望する点で、彼女の性愛の振る舞いは、パリへの旅立ちの夢想と通底する。芳枝の愛は、夢想のなかの愛であると論定できる。

早川久邇の愛はどうか。この音楽家志望の少年は病氣療養のため、海辺にやってきて、同じ年齢の三枝道子と知り合い、道子に思いを寄せる。久邇の愛はプラトニックなものであり、あこがれの感情に近い。この点、『アドリエンヌ・ムジユラ』のヒロインの愛に類似している。しかし久邇はアドリエンヌのように、秘密と沈黙のなかで情熱を生きるのではなく、相手と交流をもちながら愛をはぐくむ。「あなたあたし好き？」との道子の問いに、久邇は、「誰よりも好きだよ」と答える（1、三三三頁）。また「本当に僕たち結婚できるのだね？」と彼は訊き、「男の人はせめて二十五くらいにならなくちゃ」とはぐらかす道子に、「ね、もっと早くしようよ、二十歳ぐらいの時にさ」と詰め寄っている（1、三九一頁）。久邇は道子に肝胆を傾ける。彼の愛は非現実的ではない。愛する人と結婚したいと欲する気持ちは、年齢にかかわらず誰もが等しくいだく思いであり、ごく自然な感情である。久邇は愛の証しをもとめて結婚話をするのだ。

では、久邇の愛し方ははたして現実的だろうか。答えは否定的にならざるをえない。久邇の愛は他者の現実にくくしてではなく、その現実を離れて育成されているからだ。プラトニックな愛は美しいもの・価値あるものへの愛であるがゆえに、対象を偶像化し、理想の存在にみなしがちである。そのとき、対象は観念の世界に入り込んでしまう。三枝芳枝が桂昌三の内面を顧慮する態度を見せなかったのと同じように、久邇は道子の内心を思いやり、理解しようとする

る姿勢に欠ける。道子を理想的な存在として愛しているからだ。物語の冒頭、久邇は、「ああ僕は愛している。それが分つたのは何となく嬉しさだろう」（1、四四頁）と胸を躍らせている。彼は愛しているということ自体に陶醉する。作品の終わり近く、桂の発表を翌日にひかえ、三枝芳枝の家で晩餐会が催された夜、久邇はベートーヴェンのピアノ曲「月光」を弾く。その折、彼は、「未知だから愛している、不安だから一層愛している、そしてそれでいいのだ、不安だって愛している限りは幸福なのだ」と確認し、生きることの「悦び」にひたっている（1、四四五頁）。久邇にとつて、愛しているということが大切なのであつて、道子その人は重要性をもたない。愛への憧憬、愛そのものへの愛が一貫していだかれていく。愛の想念のなかで、他者は現実の存在ではなく、想像上の存在と化している。

早川久邇の愛を一瞥した。久邇の愛を不可能にするのは、言うまでもなく、道子が彼を愛さず、別の人間（桂）に心惹かれていくという冷徹な事実である。けれども久邇が想像上の存在を追いもとめているという点もまた、愛の不可能性に関与している。久邇があるがままの道子を直視し、わかろうとする構えを見せていたら、道子の心を自分に向けることができたかもしれない。彼の愛し方によつてもまた、愛の挫折は運命づけられている。三枝芳枝の愛と同じく、久邇の愛は、夢想のなかの愛である。

## (4) 『草の花』

『草の花』においては、汐見茂思の愛が問題となる。「第一の手帳」(第二部)の、藤木忍への愛を考察しよう。藤木忍とは、旧制高等学校時代の汐見が所属していた弓道部の後輩である。汐見は藤木を情熱的に愛する。この愛が同性への愛であるため、障害を内包していることは既述した。しかしながら、藤木が汐見の愛に応えようとする場面も注意をひく。第二部の終わりのほうで、弓道部のコンパがおこなわれることになり、合宿先の寮から、汐見が藤木と、それに同じクラブの森、矢代とともに、小舟に乗って会場に向かう途中、艀が海に落ちてしまう。森と矢代が泳いで岸に戻るあいだ、舟を見張る汐見と藤木は沖で二人きりになる。汐見は艀を探すことを提案する。泳げない藤木は「こうして待っていきましょう」(2、三七三頁)と応答する。汐見は「藤木のかほそい身体を抱き寄せる」(2、三七四頁)。「気の遠くなるような恍惚感」ないし「飛翔感」を味わい、「精神と肉体との統一」のなかで「陶醉」にひたる(2、三七四頁)。これは愛のよるこびの体験であり、自己の愛が受け入れられたと思えたことに立脚する。この感触は錯覚ではない。のちに藤木は死を覚悟したこのときのことを、「もしああして死んで行くのなら、汐見さんを愛することが出来るような気がしていました」(2、三八〇頁)と振り返っている。藤木は同性愛者ではないとしても、汐見の愛に報いる姿勢を示すこともあったのである。

とはいえ、死を意識しない日常的時間においては、藤木は汐見か

ら遠ざかる。弓道部の合宿におもむく際、汐見は、二人だけで山越えをして行こうと誘う。藤木はことわる。汐見が藤木の家を訪ねても、彼は「会うことを避け」、「話をすることを避ける」(2、三三四頁)。いったいなぜ藤木は汐見を忌避するのか。この問いに答えるために、汐見の愛の形態を究明しよう。それは基本的にプラトニックなものである。もちろん彼の愛は「physiqueな要素」(2、三三〇頁)を含んでいる。桜が満開の季節に、弓を引いている藤木を見て、汐見は、「花片の散りかかる」、彼の「裸の白い肩」に眩惑され、「何か息苦しいものを感じ」る(2、三三〇頁)。この感覚は、内部でうごめく欲望と、この欲望を抑えようとする心の動きとの葛藤から生じている。汐見は藤木のもとを離れ、防波堤へと逃亡する。芽生えた欲望を禁じ、制圧してしまう。彼の内心には、欲望を不純なものともなし、これとたたかおうとする純粋志向が存在する。

純粋志向をかかえ、しかも愛を肯定的に生きようとするとき、その愛は精神もしくは魂のほうに向かう。汐見は友人の木下に、藤木への慕情を披瀝しながら、「本当の友情というのは、相手の魂が深い谷底の泉のように、その人間の内部で眠っている、その泉を見つけて出してやることだ、それを汲み取ることだ」(2、三二八頁)と定義している。汐見が魂への愛を希求していることがわかる。では、「人間の内部で眠」る「泉」とは何か。△泉▽とは、生命を維持する水のごとく、愛する相手を生かしめるような価値・美点であると思われる。その価値・美点は相手が自覚せず、愛する主体が掘り起

こすものであるのだから、往々にして、客観的なものではなく、その主体の願望ないし夢想が反映したものとなる。〈泉〉とは、「相手の魂」の現実にそくしたものであるというより、愛する主体の夢想が「相手の魂」に付与したものになりうるのである。

汐見は友情を、「理解する」という言葉の表すものとはまったく別のもっと神秘的な、魂の共鳴のようなもの(2、三二八―三二九頁)とも定義している。「魂の共鳴」は、魂の相互的な交わりを前提とする。それゆえ、汐見は藤木との霊的交流をもとめて、心を閉ざさずとする。「自ら好んで自分の廻りに夢想と孤独との壁を置いている」ことを反省し、「自分というものを藤木に分らせ、愛をして豊かに実らせ」たいと思う(2、三三九頁)。汐見は、自己を理解してもらいたいと念願する。「遠くから僕が一人苦しんでいたと何になろう。僕の愛しているのは偶像ではなく人間、夢ではなく現実」(2、三四〇頁)なのだと思慮する。彼は夢想から出て現実にたどり着き、また藤木を「偶像」ではなく生身の「人間」として愛することで、孤独の苦しみを乗り越えたいと切望する。

とはいえ、こうした思いにもかかわらず、汐見はおしなべて孤独である。第二部の冒頭、手記を書く汐見は、愛を体験した十八歳と二十四歳の頃を回想しつつ、自分が「生命の充足感」や「眩暈のような恍惚感」に見舞われながらも、あるいは「燃え上る魂の歓喜」を味わいながらも孤独であったと総括している(2、二八八頁)。病いに冒された現在の孤独が「めそめそした、一日一日の生の中に

溺れつつ押し流されて行く」ような「哀れっぽい孤独」であるのにたいし、かつての孤独は、「強靱な意志に貫かれた孤独、英雄の孤独」であったと認定している(2、二八八頁)。若き日々、汐見は自己の孤独に固執し、孤独の枠内に踏みとどまって、他者を愛そうとしていた。生の実感・よろこびは、自らが選びとった孤独の範囲内で獲得されていた。孤独から抜け出ようとすると心の動きは、愛の苦悩の過程で一時的に生じたもので、基本的には、孤独のなかでの情熱の燃焼が目指されている。汐見の愛は孤独のなかの愛である。

孤独にしがみつく汐見は、やはり夢想から脱することはできない。「夢」から「現実」に到達しようと思いを決めた汐見は、藤木に愛することの苦しみを訴えながら、「もし君が愛したら、……いいかい、その時には人間の経験を絶したアイデアの世界に僕等の魂が飛翔して行くんだ」(2、三四五頁)と話している。汐見にとって、「アイデアの世界」に魂を「飛翔」させるものが愛である。この「飛翔」を可能にするのは、愛する相手の価値・美点であり、これを発見するのは、愛する主体の願望であり、夢想であろう。結局、愛するとは、「アイデア」(観念)の世界に入り込むことである。汐見は、「見える世界から見えない世界にはいつて行く、それが愛なんだよ」(2、三四五頁)とも規定する。愛とは、目に見えないもの、「物の表面」(2、三四四頁)に隠れたものを相手のうちに見いだすことである。この考え方は妥当である。だが汐見は藤木の現実を凝視し、理解する努力をしているのか。答えは否である。汐見の言う「見えない世界」

とは、「アイデアの世界」であり、夢想の世界にはかならない。汐見は他者の現実から離れ、己れの夢に釣り合った価値・美点を幻視している。藤木が、「僕なんか何の価値もない人間なのに、汐見さんにはもっと別のよう僕が見えるんでしよう」（2、三四四頁）と念を押しているのは、この意味においてである。藤木の夭折ののち、妹千枝子は、「汐見さんは夢を見てる、けれど僕には見られない」（2、三九九頁）と、生前の兄が洩らしたことを伝えている。藤木において、汐見から夢みられること、自分の現実を無視して愛されることは苦痛なのだ。だからこそ、「藤木は僕を愛することを拒絶したのではない、僕に愛されることを拒絶したのだ」（2、三五〇頁）と汐見が思い返しているように、藤木は汐見の愛を拒絶するのである。

弓道部の先輩の春日さんは、藤木への愛に苦しむ汐見に、「友情というのは壁を持たない、それは同胞愛、隣人愛として何処までもひろがって行けるものだ」（2、三三六頁）とさとしている。愛の不可能性から脱却する道は、藤木を「同胞」「隣人」として愛し、孤独の「壁」を打ち破る以外にはない。しかし汐見は孤独のなかで夢想の愛を追求する。彼もまた、己れの愛を愛している。汐見は『風土』の早川久邇の成長・進化した人物である。

「第二の手帳」（第三部）における、藤木千枝子にたいする汐見の愛を分析することしよう。第三部の物語の時点は、汐見が大学を卒業し、イタリア関係の文化団体に勤務している時点であり、戦時

下である。この時点で、藤木忍は敗血病で他界している。妹千枝子は二十歳のうら若い娘である。汐見は兄を亡くした千枝子を慰める目的から、彼女の家庭を「しげしげ訪れる」（2、三九〇頁）ようになり、愛情をいだけ。千枝子への彼の愛は、一方的なものではなく、受け入れられる。しかし汐見は千枝子との結婚を格別に望んではいない。千枝子の母親から、「汐見さん、お嫁に貰って下さる？」（2、四一五頁）とたずねられても、確固とした返事をする事ができず、話題を変えさせている。彼の愛は結婚を前提としていない。

汐見の愛は、いかなるものなのか。千枝子が汐見に、「あなたは夢を見ている人なのよ」（2、三九九頁）と言いつつ切っているところから、相変わらず彼が夢想のなかで愛していることがうかがえる。また汐見が、「一番頭にあるには千枝ちゃんのことだよ」と腹を割ったとき、千枝子は、「あなたの言う千枝ちゃんは、あなたの頭の中にだけ住んでいる人よ、このあたしのことじゃない」と反駁している（2、三九八頁）。汐見が愛するのは、現実の千枝子ではなく、想念の存在であることが察知できる。汐見は、「この健康でよく笑う少女（千枝子）は、当時の僕の夢をつくりあげていた。僕は僕の空想癖から、或いは彼女を ベアトリーチェ Beatrice と思い、或いは ラウラ Laura と思った」（2、三九〇頁）と顧みている。周知のように、ベアトリーチェはイタリアの詩人ダンテが、ラウラはペトラルカが愛した人であり、偶像崇拜の対象となった美しい女性である。ところが、現実の千枝子は、「決して際立って美しい」娘ではなく、「平凡な、そこらへん

に幾らでもいそうな女学生」であったことを、汐見は報告している（2、三八九頁）。とすれば、汐見は千枝子を特別視し、千枝子をとおして偶像を、理想の存在を追いもとめていることになる。このことは、『草の花』のエピローグ「春」のなかの、△私▽に宛てた千枝子の手紙からも瞭然としている。千枝子はその手紙のなかで、「汐見さんはこのわたくしを愛したのではなくて、わたくしを通して或る永遠なものを、或る純潔なものを、或る女性的なものを、愛したのではないか」（2、四九四頁）と証言し、「あの方が、わたくしを見ながらなお理想の形の下にわたくしを見ていらつしゃると考えることは、わたくしにはたまらない苦痛でした」（2、四八九頁）と述懐している。汐見は千枝子を、永遠の女性として理想化・偶像化するあまり、「血と肉のある」（2、四八九頁）人間とはみなさない。現実の存在ではなく、想像上の存在を愛しているのである。

第二部において、汐見は孤独へのこだわりを見せていた。孤独に沈潜する傾向は、第三部で強まっている。汐見は第三部の末尾近くで、「孤独、——いかなる誘惑とも闘い、いかなる強制とも闘えるだけの孤独、僕はそれを英雄の孤独と名づけ、自分の精神を鞭打ち続けた」（2、四六七頁）と回顧し、自己の孤独への執着を肯定している。それゆえ、汐見は「千枝子を愛する」（こと以外に、「心の悦ばしい自由」（2、四三三頁）がないにもかかわらず、自らの孤独をまもうとする。「自分の孤独を磨き、千枝子に会いたいこの蜜のような誘惑とあらがってまで自分の孤独の靨さを試そうと思っ

た」（2、四三三頁）と追認しているように、汐見は千枝子と会うことを避ける。「心から千枝子を愛していないが、恐らく僕は、一方であまりにも自分の孤独を大事にしていたのだろう」（2、四一三頁）とも彼は自省している。藤木忍への愛と同じく、千枝子への愛もまた、孤独のなかの愛である。

なぜ汐見は、かくも己れの孤独に執心するのか。「僕は人間が生まれながらに持っている氷のような孤独が、たとえどのように燃える愛の焰に焼かれようとも、決して溶け去ることのないのを知りすぎるほど知っていたのだ」（2、四一三頁）と彼は説明している。汐見は、人間の孤独が愛によっても溶けないほどに、根源的であると認識するために、愛の中に孤独からの脱却の糸口をもとめない。だがそれだけなのか。汐見が孤独に拘泥するのは、彼が千枝子ではなく、愛そのものを愛しているからでもある。とはいえ、愛は孤独の対立物である。したがって、孤独のなかにとどまって愛することは、かえって孤独を深めるし、深化した孤独は、その対立物としての愛への希求をいっそうつのらせる。だからこそ汐見は、「愛すれば愛するほど孤独であり、孤独を感じれば感じるほど千枝子を愛しているこの心の矛盾」（2、四一三頁）に言い及ぶのである。汐見の愛は、想像上の存在への愛であり、孤独のなかの愛であり、かつまた、愛それ自体の愛でもある。このことが、彼の愛を不可能にしている。「恐らくは愛もまた、人が心の中に描いたイメージを、自分自身の孤独で彩り、勝手な、都合のよい夢を見ているだけなのだ」

(2、四六〇頁)と彼は省察している。愛することは、孤独のなかで「都合のよい夢」をみることにほかならない。一言でいうなら、汐見の愛は、夢想のなかの愛である。

第三部において、汐見と千枝子とが山の中で抱き合う場面は、汐見の内面の真相を暴露するものとして注目に値する。汐見は召集令状を受け取り、出征することになる。出征を間近にひかえた夏の終わりに、浅間山の見える信州の〇村で休暇をすごす。〇村には、千枝子の通っている女学校の寮があり、千枝子とその寮にやってくる。二人は再会し、山を散策する。人気のない原始林の中で、千枝子が花を摘む。そのあいだ、汐見は愛を告白する。二人は抱擁する。「それはすべてが可能な瞬間」であり、千枝子は「無抵抗に」、汐見に「抱かれたまま眼を閉じてい」る(2、四六四頁)。千枝子は心もかからず、全面的に自己を汐見にゆだねる。しかし汐見はそれ以上、先には進まない。「何かを僕をためらわせた」(2、四六四頁)と彼は振り返り、「激情と虚無との間にあつて、この生きた少女の肉体が僕を一つの死へと誘惑する限り、僕は僕の孤独を殺すことは出来なかつた」(2、四六五頁)と注解している。またしても孤独へのこだわりが浮かび上がる。孤独は「無益な」ものであるとしても、彼の「ささやかな存在理由の全部」である(2、四六五頁)。千枝子と愛の交わりを結ぶことは、そうした孤独の終焉を意味するがゆえに、「一つの死」となる。汐見は、自分が「激情と虚無との間に」いたと知覚している。「激情」とは、千枝子の肉体を強く欲する気

持ちであり、「虚無」は、孤独によつてもたらされるものである。汐見は愛の結合を望みながらも、孤独に固執するために、結局「虚無」におちいる。

己れの孤独が溶解しかかる決定的瞬間において、汐見はどうして孤独を保持しようとするのか。前述のように、彼の愛が夢想のなかの愛であるからだ。汐見は現実の千枝子を愛していない。夢と理想を追いもとめている。とすれば、千枝子が身をまかせても、彼が現実との接触を回避するのはごく自然の成り行きである。だがそれだけなのか。汐見は守り抜いた孤独について、「この孤独は純潔だつた」(2、四六五頁)ととらえている。汐見の振る舞いには、純潔さへの執着が作用している。彼は自分が「獣にはなれなかつた」(2、四六五頁)理由として、恐怖を挙げる。「僕が感じていたものは、愛の極まりとしての幸福感ではなく、僕の内部にある恐怖、一種の精神的な死の観念からの、漠然とした逃避のようなものだった」(2、四六五頁)と述べている。この「恐怖」は肉なるものへの恐れであり、純粹志向と渾然一体となつている。「獣」への変容、肉体の欲望の解放が、「一種の精神的な死の観念」を喚起するのは、それが自己の純粹さを台なしにするからである。純粹さの消失は、汐見にとつて、死に等しい。身をゆだねる千枝子は、純粹さをおびやかす敵対者となる。抱擁のとき、千枝子が「未知の女、僕の内部への闖入者ちんにゅうしやのように錯覚され」(2、四六五頁)るのは、そのためである。汐見の愛の不可能性は、彼の純粹志向にも起因している。

純粹志向は、藤木千枝子も共有することを付言しておきたい。千枝子は無教会主義の沢田牧師のところに熱心に通う、敬虔なキリスト教信者である<sup>9)</sup>。彼女は絶えず神を意識し、神とともに生きていく。神のまなざしを感じている。その千枝子が浅間山の見える林の中で汐見と抱き合ったとき、いかなる心の状態にあったかは、エピソード「春」の、△私▽宛ての手紙で明かされている。千枝子は、「わたくしは神を忘れました」「わたくしの神を見捨てても悔いがない気持ちになりました」(2、四九二頁)と言い、さらに、「二人とも、ゲヘナの火に焼き滅ぼされてしまえばいいとまで考えました」(2、四九二頁)と書いている。「ゲヘナの火」すなわち地獄の炎は、千枝子の内部で燃えさかる愛の情熱に対応する。彼女において、信仰と愛、宗教と欲望とは相容れず、対立する。汐見への愛をつらぬくことは、神を「忘れ」るところか、「見捨て」ることに等しい。それはなぜか。肉体的なことがらを汚れたものとみなし、これを罪と結びつけ、排斥する発想があるからだ。「わたくしたちは何の過ちも冒さず、日暮に山を下りて参りました」(2、四九二頁)と千枝子は語っている。汐見と愛の交わりを結ぶことは、「過ち」にほかならない。彼女にこう認識させるのは、婚姻前に性交渉をもってはならないとする道徳観である。と同時に、自己の純潔さを保持しようとする純粹志向が、この認識に関与していることはまぎれもない。このように、純粹志向は汐見とともに千枝子の内面からも見てとれる。

山中での一件ののち、千枝子は、「汐見さんがわたくしを選んでくれなかった以上、神がわたくしを選んだのだと考え」(2、四九二頁)て、汐見への愛と訣別し、信仰に生きる腹を固める。弓道部の、兄の忍の先輩であった石井から求婚されると、「神の御心」(2、四九二頁)だと受けとめて承諾する。こうして汐見の愛は最終的に挫折する。とはいえ、この挫折は、すでに見たように、彼の愛が夢想のなかの愛であり、彼が純粹志向を有することによって、運命づけられている。千枝子の結婚は結果的、附帯的なことにすぎない。

『草の花』における汐見茂思の愛を概観した。藤木忍にたいする愛も、妹千枝子への愛も、どちらも夢想のなかの愛であり、また汐見が二つの愛を生きる過程で、純粹志向を覗かせることを論述した。合わせて、純粹志向は藤木千枝子のものであることを指摘した。

#### (5) 『海市』

さいごに、『海市』における愛を瞥見しよう。この作品では、四十歳の画家、澁太吉と古賀安見子との△現在▽の愛が、二人の△過去▽とからませるかたちで叙述される。澁太吉の若き頃の恋愛体験に論及することからはじめよう。

澁太吉は戦時中、ふさちゃんという娘と愛し合った。この娘は胸の病いをわずらっているため、余命いくばくもない。澁太吉のほうは、まもなく恋人のそばを離れ、戦地におもむくことになっている。彼にとって、出征は「死に行く」(8、一五三頁)ことと同じである。

澁太吉は親友の古賀信介に、「時間は今しかない、明日というものは、今という時間のあとには、己には己の死、ふさちゃんにはふさちゃんの死、それしかないんだ」(8、一五四頁)とぶちまける。彼は心中することを計画する。古賀は生きのびることの重要性を説き、「芸術家としての使命」(8、一五七頁)を楯に、死の決意に反対する。これにたいして、澁太吉は「己たちは、死ぬことによつてしか愛を証明できないんだ」(8、一五六頁)と反論するように、ふさちゃんと生死を共にすることが、彼女を愛したことの証しだと盲信する。けれども、彼は生への未練・執着から、愛のなかで死ぬことができない。恋人は息をひきとり、澁太吉は生き残る。ふさちゃんの墓参りをする彼の△現在▽の意識のなかで、この一件は次のように追憶される。

「二人がこっそり死ぬ約束をし、彼が約束の場所に行かなかつた日から数日後に戦争が終つた。そして彼女は病床に臥したまま、翌年の二月の初めに死んだ。彼は父親から死亡通知を貰い、彼女は死ぬ前にもう一度彼に会いたいと、なぜ訴えなかつたのだろうか」と疑つた」(8、三二八頁)。

愛に殉じることができず、ふさちゃんを一人で死なせてしまったことで、澁太吉は過重な負い目を感じる。それどころか、「彼女の家族には罪を感じないで済むとしても、彼女に対してはいまだに罪を感じていた」(8、三六八頁)との一文が示すように、亡き恋人にたいして罪悪感すらいだく。これらの感情とともに、自分は「死

にそこなつた奴」(8、一六三頁)だという意識が芽生える。澁太吉は第二部の古賀夫妻とのバアでの会話のなかで、人間を三つのカテゴリーに分類している。すなわち「自己の死を目指して歩いている奴」と、「死にそこなつた奴」と、「死と無関係に生きている人間」とであり、自分のような戦中派は第二のカテゴリーに属すると公言している(8、一六三―一六四頁)。とはいへ、彼が自己を「死にそこなつた」人間と規定するのは、戦死するはずであつたとみなすからではなく、心中すべきであつたのに、できなかったことを悔いているからである。愛の挫折感と、恋人を孤独死させたことでの罪悪感とが、物語が始まつた時点での澁太吉の内心を支配している。

以上のことを踏まえて、澁太吉と古賀安見子との愛に目をやることにしよう。澁太吉は作品の冒頭、芸術と人生における「衰弱」からの「回復」(8、二二頁)を願つて、南伊豆の左浦という漁村に逗留する。岬に蜃気楼を見に行つたとき、一人の見知らぬ若い女性と邂逅する。この若い女性は澁太吉に好意を寄せ、彼もまたその女性に心惹かれる。二人は左浦の宿屋で肉体的に結ばれる。澁太吉には別居中の妻弓子がいる。弓子との夫婦関係は冷めてしまつている。彼は旅先で知り合つた女性、安見子との愛に、残された人生を賭け、自分の芸術の再生の契機をもとめる。そういうわけで、東京に戻つてからも、二人の関係は持続する。

第二部において、澁太吉は或る美術評論家の出版記念パーティーで、旧友の古賀信介と偶然再会する。古賀は今は大学の助教授で、

心理学を専攻している。この日から、古賀との交遊が再開し、その過程で、安見子が古賀の妻であることが判明する。澁太吉は妻の弓子と離婚し、安見子と再婚することを熱望する。安見子のほうは、はじめのうち、澁太吉と関係をもちつつも、現在の生活形態を変えろことは考えない。「あたしは古賀と別れるだけの気持なんか、ちっともないんです」(8、二四二頁)と彼女は澁太吉に伝え、「あなたはおさまを愛していらっしやるのよ」(8、二四三頁)とも言い聞かせている。安見子が澁太吉を愛しながらも、今の秩序を維持することを望むのは、彼の家庭を破壊したくないからであり、彼のことを思いやるからでもある。

しかしながら、第三部で安見子は、澁太吉との関係を深めるうちに、古賀と一緒に生活することに耐えられなくなって失踪する。家に帰った彼女は、澁太吉と愛し合っていることを白状する。古賀は真相をただすため、澁太吉を訪ねる。澁太吉は安見子の告白を是認し、「僕は安見さんと結婚したいんだ」(8、四四〇頁)と願いを述べる。古賀は妻と別れることを拒否し、立ち去る。ちょうどそのとき、安見子から電話があり、明日の午後一時に喫茶店で待ち合わせの約束をする。ところがあいにく、息子太平が腸閉塞の病気の悪化のせいで入院することになり、澁太吉は病院で泊まり、翌日、太平の手術のために病院にとどまる。手術は無事終わる。だが澁太吉は安見子と会う約束をしていたことを忘れてしまう。病院から帰宅した日の夕方、古賀からの電話で、安見子が出奔したことを聞き知る。

このあと、安見子が、二人の最初の出会いの場所である左浦から電話をかけてくる。安見子は、こう話している。

「考えてみると、あたしたち一緒に愛し合っていたのじゃなかったんです。あたしたちは別々に愛していたんです、——あなたはあなたのやりかたで、あたしはあたしのやりかたで」(8、四五八頁)。

この談話は、二人の愛の在り方を端的に示している。愛し合いながらも、「一緒に」ではなく「別々に」愛するとは、相手の現実にくくしてではなく、夢想のなかで愛することを意味する。このとき、他者は幻影のごときものと化してしまう。『海市』の中心人物たちは肉体的に結ばれるという点で、『草の花』の汐見茂思とは決定的なこととなる。しかし性の交わりをとおして愛をたしかめあうとしても、彼らは現実から遊離し、夢想のなかで愛しているという点において、『草の花』の汐見、くわえて、『風土』の中の三枝芳枝、早川久邇と類似性を有している。

電話で安見子の話を聞いて、不吉なものを予感した澁太吉は、「子供の手術を口実に、無意識の裡に約束の時間を忘れてしまったのだ」と認識し、「あの時逃げたのだから今度もまた逃げたのだ」と了解する(8、四六〇頁)。「あの時逃げた」とは、もちろん、一緒にあの世に行く約束をしたふさちゃんを見棄てたという事実を指し示す。澁太吉はその時と同じように、今回もまた、死に魅せられた安見子から逃げてしまったと自責の念にかられる。作品は、八彼

女V（安見子）が左浦の岬で澁太吉とはじめて出会った場面を喚び起こしつつ、「（…）彼女もまた近づいて行きつつあった、運命の定めた偶然の方へ、或いは彼女の死の方へ」（8、四六二頁）という文で終わっている。「彼女の死の方へ」というさいごの語句によって、この出会いが安見子の死を生起させること、物語が彼女の自殺で終わることがほのめかされている。

澁太吉と安見子との愛の物語の経過をごく簡単にたどった。澁太吉の愛し方をさらに解明したい。彼は第一部のはじめのところで、「私は愛することを自分に許しても、愛されることを求めない」（8、三八頁）と語り、第二部では、安見子に、「僕は愛されるのは嫌いだ。僕は愛するだけでいいんです」（8、二〇〇頁）と言い放っている。澁太吉は、他者から愛されることよりも、自分が愛することのほうを選んでいく。それはなぜか。彼が芸術家であるという事情があるだろう。美の発見・創造のためには、受動ではなく能動的行為が必須であるからである。しかし最大の理由は、愛それ自体を愛しているという点に存する。愛を愛するとき、当然その愛は現実を離れ、夢想のなかの愛となる。ところが他者から愛されると、現実の次元にひき戻されてしまう。だからこそ、澁太吉は愛されることを嫌うのである。愛する相手にまつわる幻影を追いかけて、陶醉する——これが彼にとつての、愛することの意味である。作品の表題は示唆に富む。△海市Vとは、蜃気楼の別名である。主人公が岬に蜃気楼を見に行くところから作品が始まるので、△海市Vという表題が思い

つかれたことは、論を俟たない。しかし別の意味も含んでいる。作品の表題は、主人公の愛する他者が蜃気楼であり、夢想のなかの愛が見させる幻影にほかならないことを象徴的に示している。

グリーンの『アドリエヌヌ・ムジュラ』と、『幻を追う人』『モイラ』を、つづいて福永の『風土』『草の花』および『海市』を取り上げ、それらの作品に描かれた愛を観察した。これまでの議論を整理しておこう。まず『アドリエヌヌ・ムジュラ』のヒロインの愛は、△へだてVのなかで生きられ、対象との交流を目指さない愛である。アドリエヌヌは愛するモルクールを理想化・偶像化する。現実の他者ではなく、想像上の存在を愛している。彼女の愛は夢想のなかの愛である。

『幻を追う人』において、マニユエルは従妹マリー＝テレーズに思いを寄せる。ところが、彼のなかには純粹志向があつて、それが愛の欲望を叶わぬものになっている。『モイラ』の主人公ジョゼフは、純粹志向を極限まで生きる。熱狂的な信仰とのかかわりで己れの純粹さにこだわるジョゼフは、肉体とそれまつわることがらを徹底的に敵視する。恋愛のなかに欲望の現実しか見ない彼は、愛を知りえない。愛に目覚めたモイラと性の交わりを結んだあと、モイラを殺害する。この結末は、純粹志向の悲劇的ではあるが、当然の帰結である。

福永の『風土』のなかで、桂昌三を想う三枝芳枝は「モジリアー

「二の妻」のように生きたいと願う。芳枝は桂をとおして、想像上の存在を愛している。三枝道子にあこがれる早川久邇もまた、同様である。芳枝が桂と肉体的に結ばれるのにたいし、久邇の愛がプラトニックなものにとどまるという差異はあるにせよ、二人の愛はどちらも、夢想のなかの愛である。

同じことは、『草の花』の汐見茂思の愛についてもいえる。「第一の手帳」で物語られる藤木忍への愛も、「第二の手帳」における妹千枝子への愛も、共に孤独と夢想のなかで生きられ、現実を遊離している。また汐見からは純粹志向が看取され、それが愛の不可能性の要因になっている。純粹志向は藤木千枝子のうちにも見うけられる。

『海市』では、澁太吉と古賀安見子をとおして、肉体的に愛し合う男女の例が示される。とはいえ、この二人は各々別個に、愛をもとめている。彼らもまた、夢想のなかで愛していることに変わりがない。特に、他者から愛されることを嫌う澁太吉は、己れの愛を愛しており、幻影を追いかけている。

このように見てくると、福永の小説は、いずれも夢想のなかの愛を描出しているという点で、グリーンの『アドリエンス・ムジユラ』と共通するし、『草の花』は、純粹志向が目につくという点で、『幻を追う人』や『モイラ』とつながる。グリーン作品では、ほとんどいつも愛は告白されない。この背景として、人物たちが夢想のなかで愛をはぐくみ、多かれ少なかれ純粹志向を有するという事情が

ある。『アドリエンス・ムジユラ』、それに『幻を追う人』と『モイラ』は、グリーン的な愛を浮き彫りにする典型的・代表的な小説にすぎない。

福永の小説がグリーン作品に通底する愛を表現していること——ここからただちに意識的な模倣を読みとることは、早計である。二人が一貫して愛を、それも不可能な愛を描くのは、何よりもまず氣質的に接近しているからである。それに、純粹志向が『草の花』に認められるといつても、『風土』の三枝芳枝、『海市』の澁太吉や古賀安見子のように、福永においては、肉体的な欲望を忌避するのではなく、肯定的・積極的に享受する人物も存在する。しかも彼の人物たちは愛を告白する。福永の小説とグリーン作品とは、相違点も見いだせる。しかしながら、愛の不可能性を執拗に問いつづけるグリーン文学に接することで、福永が自らの作品世界の構築のための手がかりを得たことはたしかであろう。殊に、夢想のなかの愛という特徴をもつグリーン的愛が、福永の作家的営みにおいて、大いに参考になったことは、疑いを容れない。グリーン著作に啓発されて、福永は彼なりに、不可能な愛の主題を開拓したのだといえよう。

## 五 結び

不可能な愛の主題という観点から、福永武彦とジュリアン・グリー

ンとを比較してきた。人間が本来的に孤独であるという見方を、両者が有し、それゆえに愛を探索するという点から出発した。そして人間の孤独を具体的に形象化するために、二人が作中人物たちを、両親または片親のいない境遇に置いていることを指摘した。人物たちが愛する人間に生成する前に孤児であることを見た。グリーンは作品のなかで、人物たちの孤児性は、彼らの居住する家の孤立性と相俟って、彼らの孤立をひき立たせており、その孤立は愛の出会いのあと、鮮烈に意識される。一方、福永においては、人物たちの孤児性は、必ずしも彼らを孤立した状況におとし置いていない。しかし孤独を強く意識させ、この孤独意識が愛なるものを希求させている。このように人物たちの孤児の境遇をめぐっての処理の仕方がこの点としても、孤児性を問題にするという点で、グリーンからの福永への影響が想定される。福永の場合、グリーンの文学への共感が、作中人物の造型に作用したと思われる。

次に、二人の作品のなかでは、人物たちの愛を不可能にするような障害が存在することに着目した。グリーンにおいては、愛の対象が知的障害者であったり、聖職者であったり、同性愛者であったり、義理の兄弟であったり、従姉の夫であったり、実の娘であったり、同性の人間であったりして、愛は一方的なものにとどまっている。愛が稀れに相互的な場合でも、愛する相手が人妻であるという事実とか、戦争の勃発とかが、愛を叶わぬものとしている。とはいえ、グリーンの大半の小説のなかでは、愛を相互的にするのを妨げるも

のとして、障害が横たわっている。これにたいして、福永の小説では、愛する相手が別の人を愛しているという事実によって、愛が不可能になることもあるものの、多くの場合、愛は相互的なたちをとる。にもかかわらず、戦争とか、愛する人物が既婚者であることによって、愛は成就しない。福永においては、愛の障害は愛し合う人物たちのあいだに立ちはだかっている。このように、その内容に差異は見られるけれども、グリーンと福永の作品では、愛の実現をばばむ障害が設定されている。愛の可能性が充溢する、グリーンの作品世界に触発されるかたちで、福永が自らの文学的宇宙を構築したことは明白であり、不可能な愛の表現の一環として、彼なりの仕方で障害を設けたのだと考えられる。

このあと、愛を不可能にする障害は、愛する人物の内部にも潜んでいることを論証するために、グリーンと福永の作品を個別に検討した。グリーンの『アドリエンヌ・ムジュラ』と、『幻を追う人』『モイラ』、それから福永の『風土』『草の花』『海市』に描かれた愛をしらべた。グリーンの場合、愛の不可能性の原因は、『アドリエンヌ・ムジュラ』のヒロインの愛のように、それが夢想のなかの愛であること、そして『幻を追う人』『モイラ』の主人公のように、作中人物が純粹志向をもつという点に存する。同じように福永の小説も均一に、夢想のなかの愛を扱っており、純粹志向は『草の花』において目に留まる。もつとも、福永においては、肉体的な欲望を容認する人物たちもいる。けれども就中、夢想のなかの愛という言い

方によって押さえられるグリーン的愛が、福永の文学的営為のなかで、大いなる参照の対象となったことは間違いない。

このように、作中人物たちの孤児性、愛の障害の設定、人物たちの愛のありようという点において、グリーンと福永とのあいだには影響関係が認められる。グリーンにおいて、愛が告白されないのにたいして、福永の作品では告白されるといふ大きな違いがあるものの、結局、福永はグリーンを読むから、不可能な愛という文学主題を追求することのうながしを受けるとともに、この主題によって作品世界を構築することを学んだのだと結論しよう。

とはいえ、福永にたいするグリーンからの、内容・主題面での影響は、不可能な愛の描出だけにとどまらないように思われる。グリーンも福永も、人間が孤独のうちに死ぬという事実をしきりに問題にするという点で共通する。死の主題という角度から、二人の文学をくらべることを、次の課題としたい。

#### 註

(1) 目次の三までに当たる部分は、「福永武彦とジュリアン・グリーンにおける不可能な愛の主題(一)」として、山口大学『独仏文学』第三十二号(二〇一〇)に発表。

(2) (c) Denis de Rougemont: *L'Amour et l'Occident*, coll. 10/18, Union Générale d'Éditions, 1962, p.33.

(4) André Blanchet: «Julien Green en proie à l'existence», in *La Littérature et le spirituel*, t.II, *La Nuit de feu*, Aubier, 1960, p.186.

(5) *Ibid.*, pp.186-187.

(6) *Ibid.*, p.187.

(7) 私は以前、アドリエンスの愛について、もっと詳しく論じたことがあった。拙稿「アドリエンス・ムジュラの愛について」(山口大学『独仏文学』第二十六号、二〇〇四)を参照。

(8) 『幻を追う人』と『モイラ』については、もっと大がかりな分析をこころみたことがあった。拙著『ジュリアン・グリーン研究序説——『幻を追う人』『モイラ』の読解——』(人文書院、二〇〇二)を参照。

(9) 一方、汐見はキリスト教と距離を置いている。彼は中学の頃、「聖書を読み、イエスを信じ、イエスの言ったとおりに行動しようと思った」(2、四二〇頁)ことがあると、千枝子に打ち明けている。しかし「基督教に救いを求めた」(2、二八七頁)けれども、「神は僕の前に姿を現さなかった」(2、二八八頁)と振り返り、「僕は神を殺すことによって孤独を軋くした」(2、四二五頁)と断言している。汐見は孤独を重視するがゆえに、信仰を棄てたか、信仰をもたない人間である。

(10) ゲヘナとは、エルサレム西南方の谷の名前であるが、この谷では偶像神バアルが崇拜されていたため、ユダヤ人たちから呪われた土地とみなされていた(小林珍雄『キリスト教用語辞典』東京堂出版、一九七一を参照)。新約聖書では、地獄の同義語として用いられている。

(11) 彼女は本名は安見子であるが、普段、この略称が通用している。